

終わってみれば やっぱり・・・しかし・・・
(大相撲名古屋場所観戦記)

新大関登場の場所で、何やら余計な期待をした人もいたようだが、収まるべき所へ収まった。
場所前の諸々の報道を見た結果から、私見としては「白鵬の優勝は動かないだろう」と見ていたので、予想通りの結果と思っている。番付を上から順になぞりながら、今場所を振り返ってみる。

<横綱篇>

場所が始まる前から多くの人が注目していた「通算勝ち星 1047 勝」の魁皇の記録が破られる日。
白鵬の初日からの相撲は、「そこに向かって走るルールが敷かれている」かのように堅固なものだった。むしろ全勝優勝を感じさせるような毎日であったが、10 日目に千代の富士の記録 1045 勝に並んだ後、11 日目に御嶽海に黒星を付けられてしまった。正攻法で攻める御嶽海に一方的に敗れたということは、「御嶽海が力を付けて来た（世代交代）」という見方以外に、「白鵬の力が落ちてきた（時代の終焉）」「白鵬が迂闊な立ち合いで攻め込まれた（慢心・油断）」「記録を意識して（緊張）」などいくつかの見方が出きるが、本人のみが知ることだろう。皮肉なことに、御嶽海はこの一番で新関脇としての勝ち越しが決定。（左画像：中日スポーツ紙面より）



千秋楽の相撲を終えて「通算成績 1050 勝 219 敗 58 休」（98 場所）。
ここから先は前人未踏の領域に入って一步一步記録を積み重ねることになる。本人は「次の目標は幕内通算 1000 勝」と言っているが、現在 956 勝 171 敗 58 休（79 場所）なので来年中に達成可能だろうと思う。

日馬富士は初日・二日目と連敗したことがたたり、優勝争いに名を連ねることなく 11 勝 4 敗で終わった。土俵上の動きを見ていると、明らかに足と肘に問題があることが窺えた。

稀勢の里の故障は全く回復しておらず、この先どこまで不調が続くのか心配な状況である。鶴竜とともに途中休場し、相撲協会の看板を半分下ろした不自然な形になってしまった。結果として四人の横綱の成績の合計で見ると「29 勝 11 敗 20 休（勝率 0.483）」となった。

<大関篇>

大関についても同様の成績で見ると、三人で「17 勝 19 敗 9 休（勝率 0.378）」ということになる。
鳴り物入りで名古屋に乗り込んだ新大関高安は腰高の欠点を再び露呈し、しかも場所の途中から土俵上の仕草を見る限り「足に故障あり」と見た。9 勝 6 敗に終わり、何とも期待外れなスタートになった。
基本から逸脱した無理な相撲で大怪我に至った照ノ富士は、膝が完治していないばかりか悪化している感じさえ見られ、それをかばうために新たな怪我をも呼び込んだ。豪栄道ともども「いつまでこんな状況が続くのか？」が気になるところだが、高安が復活するか否かによっては大きな問題に発展しかねない。

<関脇篇>

古くから「関脇が活躍する場所は面白い」と言われてきているが、ここ数場所の流れを見ると「まさにその通り」と言うことができる。

新関脇の場所を 9 勝 6 敗で治めた御嶽海は、優勝した白鵬に付けた唯一の黒星が評価されて殊勲賞。鋭い踏み込み、脇を固めた攻め方、体全体で前に圧力をかけながら繰り出す押し・突き・寄り、逃げたり叩いたりしない「けれん味のない相撲」は高く評価できる。横綱・大関を脅かす位置に常に居てもらいたい存在になってきた。

御嶽海同様にここ数場所力を付けて来た玉鷲は、今場所は腰の構えが決まった突き押しがやや陰りを見せた取り口が目立った。千秋楽に栃煌山に完敗して 7 勝 8 敗と一点の負け越しとなった。来場所は小結に止まれるか、平幕に落とされるか、微妙な状況になってしまった。関脇の成績は「16 勝 14 敗（勝率 0.533）」

<小結篇>

35才を過ぎてもなお若々しい覇気のある相撲を見せてくれる嘉風は9勝6敗で東小結の座を守ったが、西の小結琴奨菊は7勝8敗で平幕への陥落が決まった。新しい力の台頭の中で、「ひとつの時代の動き」を感じさせる象徴的な結末となった。小結の成績は関脇と同じく「16勝14敗（勝率0.533）」。

（右画像：3日目玉鷲を攻める嘉風）



<前頭上位篇>

前頭上位陣では、貴景勝・輝が大きな壁に跳ね返されはしたが、自分の相撲をきちんと取っていたのが目についた。こういう力士はこれから力を付けてくるに違いない。その何よりの証拠に、じわじわと壁を乗り越えつつある北勝富士は自己最高位二枚目で8勝7敗と一点の勝ち越しとなり、来場所以降が楽しみになってきた。今場所も大活躍だった宇良は高安戦で足を痛めてしまって尻つぼみ、遠藤の復活も大いに期待されたが、途中休場となってしまった。有能な若手力士が怪我をきっかけに低迷している姿が目立つ昨今、怪我の少ない体作りがいかに大事かを痛感する。

毎場所若手の進出が著しい前頭上位で、「まだまだ健在なり」と力を見せつけたのが春日野部屋コンビの栃ノ心（9勝6敗）・栃煌山（12勝3敗）。

<前頭中位・下位篇>

前頭中位では、横綱大関と顔が合わない前頭8枚目の碧山の13勝2敗が光っていた。千秋楽の結びの一番まで優勝の行方が決まらないという面白い展開を作った点では、白鵬を破った御嶽海とともに今場所の立役者と言える。前項で触れた栃ノ心・栃煌山と同じ春日野部屋の所属であることも特筆すべきことだろう。

阿武咲（10勝5敗）は新入幕から二場所連続二桁勝ち星という偉業を達成した。御嶽海・北勝富士とともに実直な前進相撲は大きく期待が広がる。

きびきびした相撲がよみがえった松鳳山は、いつの間にか10勝5敗の成績を上げていた。

<十両以下篇>

十両でも朝乃山・大奄美・豊山の三人による優勝決定巴戦が行われるなど、新しい力が大活躍した。相撲界全体で確実に「世代交代への胎動」が始まっているように感じる。



そんな中で、膝の怪我で十両下位まで陥落した安美錦が今場所10勝5敗の成績を上げて幕内復帰に向けた動きが見えてきた。14日目大奄美戦で、熱戦の末叩き込まれた安美錦が「髷を引っ張られた」ことをゼスチャーで主張したことから物言いとなり、協議の結果反則が成立。激しい攻防の中で意図せずに髷に指が入ってしまうことがあるだろうから悪意はないものの、叩きに頼る力士が陥りやすい。

安美錦は貴重な1勝を得て10勝5敗で千秋楽を迎えることができたし、大奄美はこれにめげず千秋楽に優勝決定戦を制して優勝、めでたし・めでたし。（左画像：某スポーツ紙より借用）同じく東幕下28枚目まで落ちた豊ノ島が5勝2敗を上げたこと、さらに元幕内の升乃山が序二段の優勝決定戦で敗れはしたものの7戦全勝の好成績を上げたことなど、朗報も書き加えておきたい。

<立ち合いの乱れ>

今場所もかなりの取り組みで「立ち合いの乱れ」が見られ、観客席に不快感を与えた。仕切りの間に相手の顔を見ていない上に、立ち合いの駆け引きだけで白星を得たいという心がありありと窺える力士が少なくないのが背景のひとつ。もうひとつの背景として、「仕切りから立ち合いの動作に関する規則」が影響している。蹲踞の姿勢で睨み合った後、腰を割って、両手を着いて、呼吸を見計らった行事の軍配に従って立てば何の問題もない。現状では「蹲踞の姿勢で相手を見ず、相手の動きと合せることはしていない」し、「腰を割らないで中腰のままで立ち合いの準備に入る」力士がいて、「好き勝手な手の着き方で立ち上がる」のでは上手く行く訳がない。「片手を着いて呼吸を計り、残りの片手はチョン着き」「両手ともにチョン着き」が目立ち、きちんと両手を着いて立ち上がる力士は少ない。

こんな簡単な規則が作れない状態では、「相撲協会はやる気がない」としか思えない。